

CATCH UP WITH AND OVERTAKE

～伝承～

このコーナーは、消防の先輩から後輩へ伝承することをテーマに色々な先輩方からのインタビューを掲載していきます。

今回は、平成30年4月からの2年間、大阪市消防局から柏原羽曳野藤井寺消防本部に出向されておりました大塚課長のお話しです。

これまで、救助隊としても長く活躍されており、国際消防救助隊員としてエジプトに派遣されるなど非常に経験豊富な先輩です。柏原羽曳野藤井寺消防本部の後輩代表として松本司令補がインタビューしてくれました。



ズバリ！大塚課長にとって「救助訓練」とは??

「青春！」と言いたいところですが…
消防人としての基本を再認識させられた場であり、成長させてもらった場所

大塚課長直伝の引揚救助の要領を動画で紹介！

大阪市消防局公式YOUTUBE



警防対策担当課長 大塚 通寛

昭和40年生まれ(54歳)、昭和59年拜命救助隊長、特別救助隊長として活躍したほか、被服関係や消防装備関係等の多様な業務にも携わっている。

救助現場経験については、幾多の市内災害をはじめ、大規模災害への派遣経験など、まさに「災害救助のエキスパート」である。

【引揚救助の実績】

救助技術近畿地区指導会 11回出場
全国救助技術大会 4回出場
第20回・27回全国救助技術大会 第1位

引揚救助の魅力

松本 引揚救助で救助者も補助者も経験されていますが、まったく違った感覚ですかよね？

大塚 救助者(2番員)には迅速さが、補助者(4番員、1番員)には、救助者の迅速さをサポートする正確さが必要で、それぞれの番員が違う作業を行うので、各番員に魅力があり、指揮者(1番員)として隊(チーム)を任せてもらえて、両方とも自分のためにもなりました。

前向きに進める

松本 後輩に声をかける時、よく「苦しい時にこそ笑顔やっ！」とおっしゃっていたと聞きましたが、その神髄は？

大塚 災害現場では決して笑顔なんか出来ないのですが、訓練中においては隊(チーム)が伸び悩んでいる時等に、誰かがミスをして落ち込んでいる時等に、「悪い雰囲気払拭するため、「改善策を考え、前向きに物事を進めて行くために」という意味合いで、笑顔を忘れず元気に対応していく気持が大切と考えています。

自覚と自信

松本 全国消防救助技術大会で日本一になって何か変化はありましたか？

大塚 コツコツ積み重ねてきた部分的な訓練が、結果に繋がっていることを確信しましたし、補助者(指揮者)として出場した後は、隊長としての自覚が生まれ、隊員との現場活動や技術指導などにも、自信がつかました。

努力してきた答えを出す

松本 救助訓練で辛い時や苦しい時もあったと思いますが、大塚さんの一番の心の支えは何でしたか？

大塚 真夏の灼熱の状況下、訓練場で共に汗を流し頑張ってきた仲間達が周りに居たことは勿論ですが、その際に消防署で支えてくれ応援してくれていた、先輩、後輩、同僚達が居てくれたこと、その感謝の気持ちに伝えることと、自分自身を信じて努力してきた答えを出すことが、私の支えでした。

後輩たちへメッセージ

長期間の訓練に耐えうる肉体、体力を、作っておく必要があります。体調不良や体を痛めては、継続した訓練が出来なくなるからです。そして、常に周りの仲間への感謝を忘れず、自分に厳しくコツコツ努力して、諦めずに技術の向上、研究に努めてください。



達人から教わる引揚救助の極意！

強化訓練時期以外でも、個人で出来る部分訓練を工夫して行っておくことが必要です。

- ★各番員、カラビナを操作する回数が多いので、安全環の開閉、取付け、取外しは、確実に1回1動作で実施し、細かいタイムロスを少なくする。
- ★降下、登はん、要救助者の引揚げ時の動作タイムより、いわゆる繋ぎの部分の正確さが必要である。
- ★個々の活動動作が、全ての番員と連携・連絡しており、全番員が動きやすく出来るように繰り返し確認し合って精度を高める。